

【海外学会報告】

国際フランコフォニー学会 第26回世界大会 参加報告

Conseil International d'Études Francophones (CIÉF), 26^e congrès mondial, 10-17 juin 2012, Thessalonique

6月10日～17日にギリシア第2の都市でマケドニア地方の中心地テッサロニキで国際フランコフォニー学会（CIEF）の第26回大会が開催され、15日のセッションで発表・司会を務めてきた。

セッションのテーマは「ケベック文学における、戦争、テロ、暴力」*Représentation de la guerre, du terrorisme et de la violence dans la littérature québécoise* で、まず、コンコルディア大学のリュシー・ルカン Lucie LEQUIN 教授が「『東の間の幸福』と『九日間の憎しみ』における戦争」*Le dire de la guerre dans Bonheur d'occasion et Neuf jours de haine* と題した発表を行い、貧困から逃れる手段として戦争を見る男たちと、武器によってではなく、人間愛によって救いを求める女たちの視線を興味深く比較分析した。

次に、モンレアル大学のジル・デュピュイ教授が「ルイ・アムランの『オオヤマネコ座』における十月危機と戦時措置法」*La Crise d'Octobre et les mesures de guerre dans La constellation du lynx de Louis Hamelin* と題した発表を行った。1970年に過激派FLQ(ケベック解放戦線)によって引き起こされた2件の誘拐殺人事件（うち1件は人質が生還）は「十月危機」と呼ばれ、ケベック史上に残る稀なテロ事件である。この事件は1990年代から、再び作家たちに取り上げられ、連邦政府がとった戦時措置法は事件の規模などから考えると過剰反応ではないかとして、様々な解釈がなされてきた。2010年に発表されたアムランの小説が9.11事件以後の世界でテロと戦争の弁証法をいかに照らし出しているかを明らかにしようとする意欲的な発表であった。

最後に小畑がアキ・シマザキの『秘密の重み』*Le Poids de secrets* について発表を行った。『ツバキ』に始まるこの中編連作は、マリコやユキコら様々な登場人物の視点から語られる。暴力の特徴がコミュニケーションの不可能性からある者の意思を他者に押し付ける乱暴な措置にあるとするならば、正当性を求めることはしばしばある特定の解釈を強制する暴力に繋がるのではなかろうか。『秘密の重み』は複数の語りを採用することにより、暴力の連

鎖からかろうじて逃れていると考えられる。アトム・エゴヤンの『アララトの聖母』やワジュディ・ムアワッドの『灼熱の魂』にもそのことはあてはまるのではないかと指摘して発表は終わった。

「やり直し総選挙」直前で、街の中心「アリストテレス広場」では連日のように赤旗がはためき政治集会が開かれていた。しかし、「財政危機」に発する混乱を尻目に、テルマイコス湾沿いに立ち並ぶカフェで夕陽を眺めながら「フラッペ」と呼ばれる泡立てたコーヒーを飲む人々を見ていると、目先のことにとらわれない広い世界観と様々な人々が行きかったマケドニアの長い歴史が思い起こされた。

(小畑精和)